

『安政5年 輪島の米騒動』

（県民大学校能登校「古文書解読講座」より）

輪島市 左古 隆

はじめに

安政5年（1858）、加賀藩の広い範囲で米騒動が発生しました。始まりは金沢での騒動でしたが、やがて加賀・越中・能登の各地でも発生します。原因は、米価の高騰です。そのなかで最後に発生したのが輪島でした。平成26年度と平成29年度の能登校「古文書解読講座」で、この輪島米騒動に係る史料を使用し、藩の動きと地方の受け止め、騒動の実態について紹介しましたので、その概要を報告します。



古文書解読講座

一 金沢卯辰山の騒動

安政5年7月11日夜、卯辰山に集まった約2000人の人々が金沢城に向かって「ひだるい」と泣き叫びました。城の泊り番は「其声近く聞え」と記し、丁度、藩主斉泰がお城に居た時でしたから斉泰にも聞こえていたことでしょう。その後、城近くで打ちこわしもあったようです。翌12日の夜も人数は約400〜500人と減りましたが、同じように叫びました。米価高騰の原因は、安政期の藩による高米価政策と米商人の買い占めに加え、同5年2月の大地震で加賀、越中が大きな被害を受けたことや5月〜6月に続いた長雨によるものと考えられています。（長山直治『加賀藩を考える』桂書房2013）米価は、平年なら1升60〜70文ですが、安政5年初めには100文を超え、7月7日、8日頃に町民が組合頭に救援を要請していたようですが、取り上げられませんでした。そして、11日には130文となったために窮民たちが立ち上がったのです。この騒動の翌13日に100文に値下げとなり、その後73文と下がりました。

金沢では、これで収まったようですが、7月15日〜16日には鶴来で数百人が米屋や富商を打ちこわし、高岡でも800人余が50軒近くを打ちこわしました。25日には井波でも発生し、その他氷見・今石動・放生津・福光・戸田・中田・子浦・所口・宇出津・飯田などでも騒擾がありました。まさに加越能三州全体です。当時の武士は「御国初以来弍百五拾年之間未曾有之変事」とまで記しています。（若林喜三郎『加賀藩農政史の研究（下）』吉川弘文館1972）

二 藩の通達と地方の対応

このような事態に対し、藩では地方に対しても金沢に準じた値下げの指示を出します。米価高騰期のこの時期は、米1升100文以下が当面の基準になっていたようです。（筒井小紙留）（氷見市立博物館蔵）によれば次のような書状が確認できます。

① 能登十村連名請書（7月13日以降のもの）
能登地方では算用場奉行（藩の経理担当、農村支配の最上層）からの通達が郡奉行（農村一般行政

担当）経由で十村（他藩の大庄屋に当たる有力農民）に届いています。口能登と奥能登の9名の十村が連名で郡奉行に提出した請書には「米相場高直で世上騒々敷折柄」という一連の騒動の様子が記され、「金沢町の米商人が白米1升を100文で売ることにしたから郡方もそれに準じて値下げして売るようにとの御奉行からの指示は承知しました。ただし、地域により上下があることや値下げすることでの損害額についても詮議してほしい」とあります。

② 十村 得能覚兵衛書状（7月18日）
18日付の奥能登担当の十村得能覚兵衛から同じく奥能登担当の筒井源之丞に宛てた書状があります。覚兵衛は「金沢は100文売りとなったが、必ず100文以下で売れというのではなく買入れ値段に依りて値下げせよとのことだ」と解釈しています。そして、担当する「奥郡之模様忝と相分り不申」とか「諸方ハやかましく候得共奥郡ハ格別米支ニも有之間敷候間」とやや樂觀的な様子で、この後の輪島の打ちこわしを予測できてい

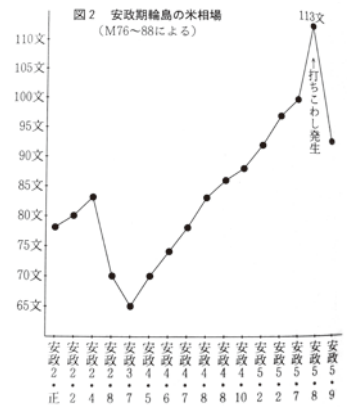
ません。鶴来・高岡での騒動を知っていたのではないかと推測されま

③ 郡奉行達書（7月26日）『輪島市史第1巻』所収

さらに、26日付の書状があります。これは、算用場奉行の指示を受けた郡奉行から別の郡奉行へ宛てたもので、貧民騒擾についての取締りを命じたものです。米価高騰のため「加州・越中所々致乱妨候林有之」ので、油断せず「少しも騒立不申様取締可致」十村たちに心得させるようにとの内容です。この通達を受けた郡奉行は鳳至郡の十村に対して「取締方無油断心を尽し世話可致」と指示を出しました。かなり切迫した様子も伝わりますが、この十村への指示文は8月4日付となっています。7月26日からは少し日が経っています。輪島では、すでに8月2日に騒動が発生しており、指示の伝達が遅れたのではないかと考えられます。また、宛名に輪島の属する十村組（河原田組）が欠けているので、騒動発生を知った直後に出されたものとも推測できます。

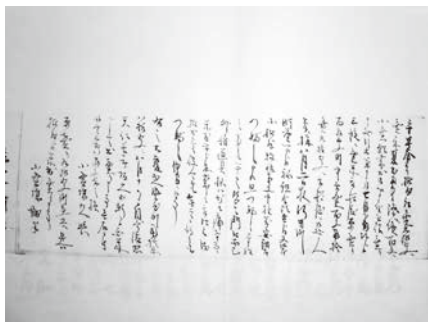
三 輪島の騒動

輪島地区の米価は、安政3年7月には1升65文でしたが、同5年2月には90文を超え、7月上旬に100文、下旬には113文と上昇しています。（米価グラフ）『能登輪島住吉神社文書目録』解題 輪



輪島の米価

島市教育委員会(1992)そして、8月2日の夜、輪島川東岸の河井町で打ちこわしが発生しました。打ちこわされたのは米屋や肝煎、組合頭ら町役人など7〜8軒です。その様子は、大勢で「屋根を捲り家屋を破壊して衣類金穀を撒き散らし」とあります。（『輪島町史』1984復刻版 新興出版社）一方、被害に遭った家について「門口のみをつぶし、諸道具などは少しも痛めなかつた」と記す史料（住

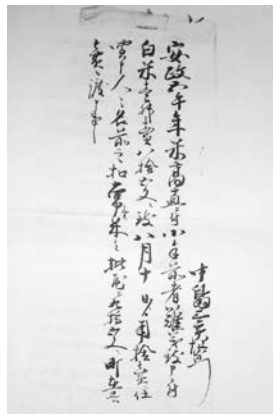


能登輪島住吉神社文書

吉神社文書) もあります。

当時、輪島には武士が常駐していません。海岸防備のために派遣されたもので、嘉永7年(1854)から「輪島在住」を長に御馬廻・与力・同心と足軽が住んでいました。この武士たちが出動して騒動を鎮圧し、首謀者を検挙しました。

その後、8月7日付で郡奉行から十村へ白米を100文以上に売らないようにと指示が出され、8月10日からは輪島川西岸の鳳至町で5人の富商たちによる安価米(1升85文)が提供され「住吉神社文書」、140人の貧民が購入しています。



同住吉神社文書

富商者は、いずれも質屋を営み、蔵宿・酒造・船主・米屋などを兼ねていました。

四 騒動後の様子

江戸時代、打ちこわしはご法度で、見せしめのための厳しい処罰が下されました。この安政の米騒動では多くの処罰者が出ています。輪島では、首謀者が検挙され、

金沢へ送られました。そのうち38歳・28歳・22歳の3名は、翌安政6年9月に公事場において刎首され、首は金沢から輪島まで運ばれ、輪島で梟首となっています。その際、首送りの通達が出ていますが、それによると足軽などが付き添って厳重に管理し、津幡昼休、高松泊、一宮昼休、川尻泊、富来昼休、劔地泊、門前昼休、長井泊、輪島昼休の4泊5日で輪島に到着する日程が示されています。金沢の騒動でも5人が処刑、鶴来も5人が磔刑、井波は1人磔刑、村役人21人が投獄されました。（前掲若林書）後世の人々は、犠牲者のお陰で米価が下落したことに感謝し、金沢では観音町の寿経寺に牢死したと考えられる2人を加えた七稲地蔵、輪島では一本松公園下の河井町墓地の中に3体の地蔵を安置しました。



三体の地蔵